

「ごちそうをさがしに

奄美市立屋仁小学校 二年 土屋 愛

ぼくは、ヤモリのポケ。まなちゃんのいえのれいぞうこのうらがぼくのすみかなんだ。

あるあさ、五ひきの赤ちゃんが生まれた。

「ポケ、あなたは、一ばん上のおにいちゃんになったのよ。」

とおかあさんが言った。ぼくは、おとうとやいもうとができてとてもうれしかった。でもうれしいのは、しばらくだった。

おかあさんは、赤ちゃんのせわでとてもいそがしそうだった。ぼくが、おかあさんにおやつをおねがいしても、「あとでね。」

と言ってなかなか出してくれなかった。しばらくまっつるとおとうとのポケが、

「おなかすいたよお。」

とぐずりはじめた。

「ええい。もう、まてないよお。」

しかたがないので、二人でごちそうをつかまえに行くことにした。

天じょうように上って行くと、おいしそうな虫を見つけた。

ゆっくりゆっくり近づいていったけれど、にげられてしまった。こんどは、大きなコオロギを見つけた。

「これはごちそうだ。」としんちように近づいて行ったポケが、よこからきてコオロギをとってしまった。ぼくは、おこった。

「ぼくが、先に見つけたんだぞ。」

でも、ポケは、聞かないふりをしてごちそうをたべてしまった。

「どこか、だれにもじやまされなごちそうをたべていよお。」

その時、まなちゃんのうれしそうなこえが聞こえた。

「あしたから、とうきょうだあ。」

ようし、ぼくもとうきょうに行くぞお。

つぎの日のあさ早く、ぼくは、まなちゃんのリュックサックにしのびこんだ。中には、ぬいぐるみが入っていて、ふわふわしていたのでつい気もちよくねてしまった。

「おばあちゃん、こんにちは。」

まなちゃんのこえで目がさめた。

「あまみはあつかったかい。」

おばあちゃんのこえできゆうにあまみのことが気になった。

「そう言えば、ぼく、お手つだいもしないままいえでしちゃった。」

とうきょうのよるは、とてもしずかだった。虫やカエルのなきごえもしない。ぼくは、どきどきしながらリュックからそとに出た。まどからそとを見るとそこはくらいばしよではなく、でんとうがチカチカしてまぶしいくらいあかるいばしよだった。きれいなあかりがたくさん光っていてよるじゃないみいだった。さらさらとした風がふいて、ぼくのつるつとした体は、きゆうにカサカサしてきた。

「なんか、ちがうな。」とうきょうは、あまみのような虫もあまり見かけない。

「こまったなあ。おなががすいているのになにもいないよ。」

すると、うしろから

「おまえ、見かけないかおだな。どこからきたんだ。」

とカマキリが、こちらを見ていた。ポケは、はじめて見るみどり色の大きな体のあい手をおこらせないように、ていねいにこたえた。

「ぼくは、あまみからきたヤモリです。ごちそうをさがしにとうきょうにきました。」

するとカマキリは、

「おまえ、みなみのしまからきたのに、まっ白だな。こは、しぜんがすくないからごちそうは、あまりないぞ。」

とすこしいじわるそうに言った。

「じゃあ、カマキリさんは、どうやって生きてきたの。」

「おれたちには、ごちそうがもらえるひみつのばしよがあるんだ。」

「えっ、ひみつのばしよ。ぜひ、教えてください。」

とポケは、おねがいをした。カマキリは、

「ひみつのばしよだぞ。かんたんには、教えられない。なにかびっくりするくらいのためものでもあれば教えてもいいぞ。」

ポケは、たくさん考えて、前に、まなちゃんが、とび上がったあでできごとを思い出した。

「では、びっくりするものを。」

ポケは、しんこきゆうして…。

「ケケケケケ。ケケケケ。」

といえ中にひびくこえでなきはじめた。とつぜんのことにかマキリは、びっくりとび上がった。

「しい、しずかに。おどろいたぞ。」

「はい、やくそくはまもりました。では、ひみつのばしよを教えてください。」

「分かった。しかたない。」

カマキリは、自分が入っているかごの中にポケをまねき入れた。かごの中には、かんそうしたコオロギがいくつもあった。

「これが、ごちそうかあ。」
かたそうなコオロギを見ながらポケは、あまみのことを
いろいろと思い出した。いへのまわりのこと、かぞくの
こと。

「まなちゃん、早くあまみにかえつてくれないかなあ。」
ポケは、前よりもつとあまみのことがすきになった。い
え中どこへでも行けて、すきなごちそうをえらぶことも
できる。えんりよせず、よるいっぱいなける。ぼくはあ
まみにうまれてほんとうによかった。